

投稿

日向薬師の歴史

島口 健次

伊勢原には日向薬師がある。かつては日向山霊山寺といわれ、元正天皇の頃(716年)、行基によって開創されたと伝えられる。日本三薬師の一つ、鉦彫りの本尊薬師如来三尊を始め、薬師如来像、阿弥陀如来像、四天王・十二神将など二十六点の国の重要文化財がある。また、樹齢八百年と言われる境内の幡かけ杉は、県の天然記念物に指定されている。御本尊は四月十五日の大祭の外、初薬師(一月八日)、正月三ヶ日に御開帳になる。本堂は平成二十三年から三百五十年ぶりの大修理を行っており、今年(十月)に完成される。平安時代には、相模守大江公資の妻であった相模が眼病平癒を祈り日向薬師を参拝したが、“さして来し日向の山をたのむ身は目もあきらかに見えざらめやは”と詠んでいる。

源頼朝は建久五年(1194)娘の大姫の病氣平癒を祈って参拝し、その後政子や鎌倉公方足利基氏、実朝の夫人なども参拝している。日向薬師は修験の道場でもあり、文明十八年(1486)、京都の聖護院准后道與は奥州巡幸の際、この日向薬師に参拝している。また、永禄十二年(1569)十月、武田信玄の小田原攻めの際には、日向の山伏が相模原市緑区青根で、信玄の軍勢と戦って討死をしている。江戸時代にまとめられた地誌「江戸名所図会」の中では、修験者が入峰修業の前後に行った「しげたて」が紹介されている。これは本堂の前にシイの木を立て、その上に修験者が登って護摩を焚き、山刀で邪霊を祓ったり、疫病除けの餅をまいたりする安全祈願の儀式であるが、四月十五日の大祭で行われている。